

「千代香さん！」

と呼びかけると、渠女は平氣な調子で、

「え、何ですよ。急に其廢に改つたりなんかして、今日はそれじゃ口があつたお祝ひに悠然として入來しやいよ。ねい。もう此間見たいなと言やしないわ。」

「實は他でもない。ですが、僕は、兄貴に言うて遣つたです。するとねい。」

すると千代香は、顔を蒼くして、皆を釣り、わななくと口唇を震はせ乍ら、

「マア、此間の事を、阿兄様に報せてやんなすつたの——妾、あれ程秘して置いて下さいつて、お頼みしたじやありませんか——。」

「否や、それは何んですが、然し僕はある日、下宿へ歸へつても如何も黙つちや居られなく思つたから、早速言つてやつたのです。すると今日兄貴の處から斯廢返事が遣つて來たのです。」

と、僕は懷にした、手紙を投げ出すやうに其處へ差出すと、渠は一目見た儘、靜かに眼を瞑つて何か深かい物思ひに沈む風情であつたが、繼て又元の冷しげな眼を睜つて、

「邦雄さん。阿兄様は一對如何言つて、寄越しなすつたの。お怒りなすつたでせう。」

と今度は前齒で口唇を噛み締める。

僕はもう語るに忍びぬので、

「何卒か是れを見て下さい——。」
手紙を突き進めると、渠女は黙つて手に取り上げたが、忽ち讀み了つて、吐息を漏した。

「邦雄さん、有難う。兄様はもうお嫁様が出来つ了つたのたわ。」

と又もや目を瞑つたが、ホロリ、と其眼に涙、俄に横を向いて浴と袖口に拭ふと、晴やかに打つて變つた調子で、

「邦雄さん。貴下は何卒か、是れからも始終茲へ遊びに来て頂戴ねえ。え、お厭や？」

渠女の言葉には眞情が籠つて居ながらも、其聲は一種物淋しい哀憐な音を立てるのだ。

「は、幾許でも來るです。僕は貴女を眞實の姉さんのやうに思ふのですよ——。」
言つて、僕も思はず男泣に鼻を噛むと、

「邦雄さん。貴下、其様に妾を能く思つて下さるの。嬉しいわ、それじや此處所でもねえ、何卒か繁々と來て下さいよ。妾も出來る丈けお力になりますわ。」

僕はそれから度々千代香様の處へ行つた。否や、行つた許りではなく、少なからぬ世話を受けて、渠女の清らかな同情に甘へて嬉し泣きに泣いたこと、二度、三度に
して止なかつたのである。

* * * * *

其後天にも地にも一人しか生き残つて居ない兄さんは、故郷に近い備前の笠岡市で、風邪が、肺炎症に變じて、肺病に罹つて、一應親戚(町の叔父上の家)へ歸へつて死んだ。

其處で僕はほんとの孤兒になつて了つたが、千代香様は相變らず僕に同情して、眞實の弟のやうにして可愛がつて呉れるのであつた。

然し其千代香様も、僕が丁度廿歳の秋、即ち其翌年、葛屋の六疊の室で、盲腸炎兼腹膜炎と言ふ難病に罹つて永への眠に就いた。

長物語は是れで終つたが、僕は今に狂瀆の世潮に、綻びがちな袖を噛んで此薄命の佳人を追想うてひた泣きに泣くのである。

* * * * *

未だ僕に悲劇い印象を止めて、ほんの昨日の昨夜までも、絶えず懊惱煩悶の汚らしい幻象となつて居たのは、彼澤子である。

あゝ澤子！渠女は、死んだやら、生きて居るやら、今は胸に輝ける壁もなからう。然しもうそれ等は一切僕にかいはつた事ではない。

第三十四回

丁度宿の時計が十時を報つて、

「藤村さん。如何も有難う。」

言ひ乍ら、細君はいそ／＼と表から這入つて来た。襟首をかき上げたが、僕の顔を見て、

「マア、陽氣付いて来ましたわねえ。今朝あたりは、悠々と人通りの多いこと。」

「然うでせうねえ。それに今日は日曜日だから猶更このとでせう。」

「貴下は、今日は何處へ散歩にでも入来しやるのですか。ホー。」

「否や、それ處じやないです。来月からは學校行を初めやうと思つてから、遊んで

も居られません。今月は大奮闘をする積りです。」

「呀、大奮闘なさるんですか、道理で今朝は馬鹿げてお早う御座いましたねえ。」

言ひ乍ら起上つて、自分等の住む室へ行つたが、早速餅菓子と茶器とを持って来て、

「マア、お茶でも入れませうよ。オホ、そのお祝ひに、サ、何卒か召上つて下さい。」

と差出して、茶をも注いで呉れる。

「は、有難う。好物ですわねえ。澤山貰ひませう。」

「今、歸途に雪子さんに遇ひましたよ。美根ちゃんも御一處で、教會へお出でなさるんですつてねえ。貴下は今日は教會へは——。」

「え、僕は今日、少し他に用事があるから、休んだですが、細君さん、貴女は近頃教會にかぶれ出しましたねえ。ハッハッ。」

「然うでもないんですけど、何んだかあつさりとして居ますわねえ。昔の宗旨のやうに煩繁なくなつて。」

「それも然うですねえ。」

と僕は茶を啜る。と細君は急に思ひ出したやうに、

「藤村さん、貴下御用事がお有りなさるのでせう？」

「ナニ、用事は有つても、別に何處へも行くのじやなく、唯自分で雑乎考へて見る丈けの事ですから、大した事でもないです。」

「それじや、依然、其學校へ入來しやるので、それをお考へなさるのですか？」

「否や、然うでもないですが——。」

すると細君は、俄に氣を變へた風に、

「藤村さん。」

と呼びかけるので、

「何んです。」

「マア、可笑しいことをお尋ねしますけれど、貴下は一生獨身で生活なさるので、又それとも出世して御立派な——。」

と、若返へつて、三十の春、顔の何處やらを染めた。

「ハ、ハ、それは如何だか、未だ〜前途の事ですから、何んとも言へないですよ。」

「否や實はねえ、妾、一寸此間中、人からお頼みを受けた事が御座いますの。」

と眞面目になつて、
「藤村さん。貴下、失禮ですけれど、若しか御養子にでも入來やるお考へは御座いませんか？」

「養子に？」
僕は眼を睜つた。

新井白石の言じやないが、僕はこの事を先天的に嫌つて居るので、
「僕は養子に行くのは厭やですよ。」
すると細君は、次ぎ穂を失つた體で、

「そうですかねえ。それじや詮方がないけれど——。」
と丸髷のてがらを見せたが、又、疑乎僕の顔を見詰つて、

「でも貴下、さう一概に仰やるが、若しか日頃貴下のお好きな方からお貰ひなされ
たら、如何なさいますの？」

「サア、然し僕には其様人は、一人も居ないですから、一向其様杞憂は要らない
ですよ。」

「呀。」

細君は乗り座になつて、茶を啜つたが、

「オホ、マアねえ。」

と空笑ひの茶は水と冷たい。

「真とですよ。其麼人は一人も居ないんですから——。」

「マア、其麼言譯は好う御座いますよ。宜う御座いますが、實際貴下入來やるお
考へは御座いませんか。え、先方の御兩親は大變に御所望なんですわ、行つてお
上げなさいよ。」

「否や、僕は養子になぞ、如何あつても行き度くないです。」
頑として鐵の如くに言ひ放つた。

「だつて貴下、先方は後を取る男氣がないのですから、詮方がないのでですよ。貴
下が、入來やれば、ズツト貴下の學資も如何にかして引續けると言ふのですわ。
入來やいな。妾、其方が貴下の御利益だと思ひますよ。」

學資を引續けて出すと言ふことに對しては、僕も少なからず心を奪はれたが、然し
今一層、養子と言ふに就て案外乘氣がしないので、

「サア、考へ物ですなえ。」

口から出任せに言ふと、細君は眞面目に受けて、

「まあ藤村さん、貴下も好う考へて見て、是非確定つた返辭を聴かして下さいよ。今日にとは申しませんから——。」

と茶器を持つて起ちかけやうとするので、大急で、

「細君さん、僕は養子行は厭やですよ！」

然し細君は、其慶事には頓着せず、

「オホ、マア貴下のお好きな方ですよ！」

笑ひ乍ら彼方の室へと、御退陣。

第三十五回

僕は待ち焦れて居た來月、四月の月は來た。新緑の山科に杜鵑を聴き乍ら、早稻

田の高等豫科に通學する身とはなつた。今年二十三歳、眼のない人は晩學の老翁と嘲けるが、然し僕はそれ等のことも寧ろ自分を鞭撻して呉れる美はしい教訓に思ふて只管勉學に耽けるのであつた。

が、僕は、他の學生と異つて學資の出所を自分がでに作らなければならぬので、學校から歸へると早速生活費を求めべく、筆耕に取りかゝつて、夜間運く迄も其方に費し、深夜人靜つて後、初めて學科の復習に取りかゝるのであつた。

僕が學校へ行き初めてから、第三日目の深夜のことである。僕は學科の復習に耽けつて居ると、風も騒がぬ夜であるに、はとくと軽く雨戸に木葉でも打付るやうな音がするので、はつと思つたが、又猫でも縁先に宿を求めに來たのであらうと、何氣なく読みかけると、又もやほとくと雨戸に寄り添ふ人の氣配がするから。

唯事ならぬ胸騒ぎに、ツト戸を押すと、途端に轉げ込むやうに、其處へ泣き崩折れた者がある。

「刹那、僕の胸は何とも言ひ知れぬ喜悅とも、忿恚とも、憂愁とも、恐懼とも、感想は錯綜れに燃えたり沈んだり、譬へ難ない惱殺を蒙けて宛然奔馬の空にあれ狂ふにも似て、苦しくつて堪らなかつたが、結局、理由の分明らぬ涙がハラ／＼と頬に傳うて溢れた。

深夜の沈静な空気は、明け半した扉を漏れ入つて、やうやくに我頭腦をも鎮らせて行くと、僕の口唇は怪しうも震ひを帯びて、空間を破る聲は意外低くかつた。

「貴女は如何なすつたのですか？この深更に——。」

「藤村さん。ゆ、ゆ、恕して下さいませし。夜中飛んだ御失禮に上つて、何とも申

譯が御座いません——。」

「否や、其様事は如何でも、貴女、此夜中に一對甚麽御用件でお出でになつたのですか、早く其要件を聴かせて下さい。」

「藤村さん。何卒か怒らないでお聴きなすつて下さいませし。」

「え、早く言つて下さい。人に聞かれると面倒ですから。」

「藤村さん——」

依然聲は低いが、果然羽織の袖口は揺れてスルリと膝元に突き進められたは、白紙の包物の

「貴下、誠に失禮で御座いますけれど、何卒か是れをお受けして下さいませし。ホンの妾の心許りで御座います——。」

「何んですか、包紙は？」

「お金です。妾の貯金でしたのを、引出して來たので御座います。何卒お受け下さいませし——。」

「それは如何な理由があるのですか。僕はお金なんか。断じてお受する理由がありません。」

「マア、其座に仰やらずに、何卒か受納めて下さりませねえ。ホンの妾の心許りなんで御座いますわ。貴下が然して御苦學なすつて居つしやるのですもの……。」

「は、雪子さん。貴女はそれで以つてお出でになつたのですか。否や有難う存じますが、僕はそれなら猶更のこと受取れないです。」

「え、藤村さん！」

「お志丈は、實に感謝するです。然しお金を頂くことは徹頭徹尾出来ないのです。」

「マア、貴下、筆耕をなさる丈じや到底も生活に追付かないで御座いますらう？」

「否や、付いても、付かなくつても其様事には一向關係がないです。」

僕の心内は、前にも述べた如く、寧ろ雪子嬢を戀ひ慕つて居るにも拘らず、斯座場合、かゝる體度は僕の性癖であるので、恬然として言ひ斥ぞけた。

「マア、それじや藤村さん。貴下は如何あつてもお受け下さりませないので御座いますか。是れは妾の、微志で御座いますのに……。」

「え、如何してもお受けする事は出来ません。僕は第一自分の心に耻ぢるです。」

「それじや、如何あつてもお受け下さらぬので御座いますか……。」

「受けません！」

雪子嬢は、わつと聲立て、泣き伏す途端、スルリと隔ての障子が開いて立ち現はれたのは此家の細君であつた。

僕は失敗つた、とは思つたが詮方がない運命々々。

第三十六回

細君は何時の間にか着物を正して這入つた來た。

「マア、叔母さん！」

雪子は逃げ出す勇氣もなくて、訴ふるやうに涙の面をふり拭いて言つたのである。細君はそれには返辭もせず、

「藤村さん。」

と怒るやうな語調で言ひ乍ら、僕の傍へ座り様、

「貴下、何故受取つてお上げなさらぬので御座います。折角親切に貴下をお同情ひなさるのじや御座いませんか。え、お受けしてお上げなさいよ。藤村さん。」
細君の言語は以外であつた。
僕は稍や度を失つた調子で、

「え、それはお受けせぬ譯でもないのですが、何んです——大變に困るです。」

「それじや、迅速とお受けしてお上なさいよ。斯う言つちや何んですけれど、貴下だつて生活がお苦しいので御座いませう。何も貴下を輕蔑んで持つて入來した

のじやなく、唯貴下を御親切にお同情なすつたので御座いますもの。雪子さんだつてお可愛相ですわ。」

「叔母さん、好いのよ。好う御座いますよ。妾もう歸へりますから、何うか此事は御生ですから、誰にも秘して置いて下さいませねえ。ねえ、お願いで御座いますわ。」

「まあ、雪子さん、お待ち下さいませ、他に話も御座いますから。」
呼び止めて置いて、

「藤村さん。」

言つたが、起上つて例の雨戸を閉めて来て、又元の座に居直ると、落付いたやうに、
「雪子さん、まあ、も少つと此方へお寄りなさいませよ。妾、貴女の阿母様から、此間中承いた事が御座いますから、丁度宜い機會ですわ。今茲でお話致しませうよ。サ、此方へお寄りなさいませ。」

僕は唯夢我夢中で、ジツト机に向つて居ると、細君は、

「まあ、藤村さん。貴下も何卒か其處に居すと、此處へ来て下さいませ。妾折入つてお頼みが御座いますから、藤村さん。」

詮方がないから、僕も机を離れて、三人鼎座に座ると、室は一種奇妙な氣に満ちて暫時は言葉がなかつたが、應て細君が口を開つた。

「藤村さん。もう先日貴下に御養子行のことを御話致しましたわねえ？」

「は、聴きました。何かその事でも——。」

「サ、その事で御座います。實はこの雪子様の御家なんで御座いますよ。」

細君は驚く雪子嬢と僕の顔を等分に見成り乍ら、

「甚だ駄當けて何んで御座いますけれど、藤村さん。如何です。貴下、入来しやるお心は御座いませんか。え、否え、何卒か入来して下さる譯には参りませんでせうか。折入つてお願致しますか？」

「然うですねえ——。」

僕は流石に逡巡き氣味に口吃ると、雪子嬢は泪の乾いた冷しい眼で、僕を見詰めるのであつた。細君は、

「雪子さん。貴女も此事は御存知じや御座いますまい？」

「ええ。」

と渠女は急に百合の姿のしほらしいランプの光線を背向けて、差俯向くのである。

「藤村さん！丁度好い機會でしたから申しましたが、如何でせう。行つてお上げなさいませよ。」

「ええ、然うです——。」

僕は依然口吃つたが、殆んど無意識に、

「然しそれは、雪子様の御一家は、擧つて僕をお望み下さるのでせうか？」

「ええ、それはもう先日一寸お話申したやうな具合で、貴下さへ、其氣におなん

なされば喜んで何になさるので御座いますよ。え、養子行はお厭やなので御座いますか？」

細君は迫つた、雪子嬢は潜つと伏目勝の眼に僕を盗見た、夜は更けた、室の空気が凜然と我身を緊縮めるやうひたひたと差迫つたのである。

然し僕の心は、未だ心に快刀を下すことが出来得ぬので、

「然し何んですなあ。」

頭蓋に手をやって、細君を見ると、渠女は燒氣となつて、座を進め、

「然し何んですなんて、仰やるけれど、貴下、もう先日にお頼み致して置いたじや御座いませんか。え、藤村さん？」

「然し、直ぐ御返辭することは困りますなあ。」

「呀、先日あれ程お頼み致して置いたじや御座いませんか。マア——。」
と憫れる顔の細君。ほ、笑む僕。傍に雪子が言はず語らぬ物思ひ——。」

夜は變てこな僕の性癖と、清らかな同情の涙の結晶とを載せて、無限の時を刻んで行く——。」

第三十七回

雪子嬢の兩親と言ふは、現今は參謀本部の小役吏を勤て居るが、以前は大阪に居て破綻した七々銀行の相當の行員で、随分有福ならぬ迄も可なりの生活をして來た人なので、其主義性格、行爲なども仲々善くつて、亦夫婦とも容貌も甚だ醜からぬのである。

殊に従者に對する同情の念は、現下の境遇にありながらも、人の知り得ぬ處に迄、深かい美はしい涙を溢されるのだ。

凡そ人は己れの弱點を適げられる程悔しいものはないと反對に、己れが薄倅の境涯を憐れみ、清らかな同情を與へられる程歡ばしいことはなからう。前者は人格の

下劣醜惡の者の爲す行爲で、此雪子嬢の両親の如きは、今、僕の眼には實に美はしい、凡てに美はしい人であると思はれるのだ。

長い月日、逆境の荒野に泣き續けて來た僕は、是れ迄に此様な眞の同情を濺いで呉れた人を見たのは初めてある。兩眼に土塗つて亡き千代香姉様のことを思つて止まぬ僕は、今又輕佻浮薄の社會に流落つて、鹽辛い波風に揉まれ、た親無鳥の、疲れ果てた羽翅の預け場所さへ無い身が、海洋の眞唯中で斯う言ふ人達に遇つて、甦つたやうな心地がする。僕は幼時い往昔に歸へつて、其處に復活の慰藉や、光みや、を認められたのである。

* * * * *

花も笑ひ、鳥も謡ひ、小川の流れば不滅の樂音を奏で、草に露あり露草の自然の嬌笑を捧げて、其翌日から可愛い美根ちやんは僕の眞實の妹となつたのである。

僕は久振りであつた家庭の和樂に浴することが出來、學校へも安心して通學へ入る。

やうになつた。

雙思樹の蔭に聖かな歌千首を誦じて、僕は今唯桂の冠の天降るのを待つのみである。

小家庭 人生の行路 終

押川春浪君著 寫真美術畫入 (五版)

世界奇談
新アラビヤナイト
第一編 價廿五錢 郵税四錢

「アラビヤナイト」は天下の奇書にして、荷くも小説を作るもの一讀せざる事なし。本書はステウエンソンの原書に基づき、著者が例の豊富なる思想と流暢なる筆を以て綴りたるもの、趣味透に「アラビヤナイト」の上にある。

押川春浪君著 寫真美術畫入 (五版)

世界奇談
ヘーグ奇怪塔
第二編 價廿五錢 郵税四錢

奇怪塔あり、大戦亂を醸し、勇士の最期に及び、黒百合花の發明となり、空前の大懸賞となり、將軍の幽霊を顯出するの奇譚を綴り、絶無の美人が勇傑を結ぶ。原書は歐洲大評判の小説に、著者の想を加へ、麗筆を振ふて此編成る以て本書の趣味を知る可し。

押川春浪君著 寫真版挿入 (六版)

航海奇譚 價廿五錢 郵税四錢

大洋と言ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚といふに至つては已に讀んで讀まざる能はず、太平洋を渡る船、大西洋に沈む船、甲板に起りたる神出鬼没の活劇、絶にして趣味多く快絶にして感興甚だし、目(海上の怪、孤島の奇遇、幽霊島、海の奇婦人、海次(軍士官、無名の碑、佐血二人、男兵二人、幻馬師、

押川春浪君著 美術寫真版入

世界奇談
立身膝栗毛
第三編 價廿五錢 郵税四錢

那翁が佛國皇帝となりし時、玉座の前に來つた一少年こそ本編の主人公にて、其後那翁の批評の目に對して、大の人物となりし、否やは彼れが運命の胸に跨つて、人生の長旅を試みし所の物語、山あり河あり、美人あり、冤城あり、その面白きは、俗に武者修りか、世界各國を廻り、千變萬化の快事に、選するも異ならず。

長田偶得君著 寫真版入(六版)

逸事
明治六十大臣
奇談 價三十錢 郵税四錢

明治十八年内閣制度改正以來、大臣の重職に上れる俊英揚げて六十人、世にその公徳を頌し美談を併ぐるもの其類多し、本書はこれと其の選を異にしてその衣冠を去り大禮服を脱きたる赤裸たる面目を寫し出せり一讀その逸事の意外に驚き、奇話の突飛なるに駭く可し。

墨堤隱士著 肖像寫真版入(七版)

大臣の書生時代 價三十錢 郵税四錢

大禮服に勳章を帯びたる現在はいさ知らず短褌袴衣の腹白時代には、奇々妙々の珍談山の如く流石に未來の宰相だけあつて、滑稽の中に學ぶべき事あり、亂暴の中に、愛すべき處あり、音の逸話を讀めば趣味の湧然たるを覺ゆるのみならず、立志の啓悟には無比の興奮たる好個の讀物なり!

池田錦水君著 岡落葉君畫(再版)

無錢修學 價廿五錢 郵税四錢

本書の目的は青年が苦學力行を獎勵するに在り、困難姑息の念を除く去るに在り、獨立自活の法を教ふるに在り、或は新聞配達となり、立坊となり、貸家捜となり、托鉢坊主となり、車夫となり、苦心困難の境遇を小説的に描き出す、附録學生自活法。

墨堤隱士著 肖像寫真入(再版)

博士苦學談 價廿五錢 郵税四錢

緒方正規、古市公威、金井延、松井直吉、荒木寅三郎、藤原重、山川健二、實吉安純、齊田功太郎、田尻大郎、佐藤進、下瀬雅九、鳩山和夫、井上哲次郎、神原才一、高木兼寛、中村六、河本龍次郎、伊藤三郎、高井政章、田口和義、岡村謙、加藤弘之、七里介、三郎、佐藤昌介、梅津次郎、元良勇次郎の諸博士が青年時代に於ける苦學の状況を描き、學に志す者をして三省せしむる爲めに著ばされたるもの本書也。

池田錦水君著 (寫真版入) (再版)

無錢修學

價廿五錢 郵稅四錢

本書の目的は青年が苦學力行を奨励するに在り、因循姑息の念を除去するに在り、獨立自活の法を教ふるに在り、或は新聞配達となり、立坊となり、貸家搜となり、托鉢坊主となり、車夫となり、苦心困難の境遇を小説的に描き出す、附録學生自活法。

早田玄洞君著 (寫真版挿入) (四版)

膽力修行

價廿五錢 郵稅四錢

風雨の暗夜荒社廢寺を探り、刑場古墳を尋ねて膽力を練磨したる實歴を描寫せるもの目次を一讀し如何に本書の趣味饒多にして練膽の道に益あるかを知らしむる可し、曰く魂曰く古寺化地蔵、古刑場、水垢離、丑の刻、古城の櫓、巖窟の一夜、食人怪、死人番、青面鬼等三十六項に分つ附録として釋宗演禪師の座禪工夫を載す。

加瀬花邦君著 (寫真版入)

探險小説 へタゴニヤ仙窟

價十八錢 郵稅四錢

本書は名門に生れし硬骨男子が威勢に屈せず奮然として故郷を後にし花の如く美に才智膽力有髯男子を凌ぐ妙齡の美人と相携えて萬里遠征の途に上り道に一箇の魁丈夫と逢ひ南洋の黄金窟を探險するの奇々妙々の珍小説。

矢野滄浪君著 (寫真版入) (三版)

食客

價二十錢 郵稅四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活讀むものをして身その中に在るの感を感じしむ寔に近時片々たる駄小説に比して趣味優ること數番なるのみならず苦學の書生に慰樂を與ふることに甚だ多し。

宮崎來城君著 岡落葉君畫 (十三版)

無錢旅行

價廿五錢 郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋渉するに在り、風を浴び露を飲み乞食と合宿するなど、辛苦の中に忘られり趣味の存するものあり、此書世に出でて忽ち數千部を賣り盡せり以て如何に壯快なる讀物なるかを知れ。

鐵脚子著 岡落葉君畫 (再版)

野宿旅行

價廿五錢 郵稅四錢

汽車の便を捨て、自備車の道を踏らず、柴粟毛に纏つて三疊の風事漢が割る處に清酒を飲じ失態を起し、而も豪放磊落一難に逢ふ毎に愈々勇を増し、青天井に草枕天地の寂寞を破る、朋輩聲は響ひ來る、數萬の雄軍を退却せしめ、一瀆の正宗に、敵機機往來、人手を振つても、流石野道の香氣此上もなき一讀噴飯滑稽無比の旅記なり。

宮崎來城君著 岡落葉君畫 (八版)

乞食旅行

價廿五錢 郵稅四錢

腹に萬巻の書を貯へながら旅行のしたさに、鉄輪を片手に乞食の仲間入して、彼處此處と經過つた實歴である、三日したら止められぬといふ乞食の境遇は、そんなものであらうか、來城氏の無錢旅行を讀んだ人は、その趣味の多い事を悟るであらう。

鐵脚子著 岡落葉君畫 (再版)

奇貧乏旅行

價廿五錢 郵稅四錢

囊中の空乏は辻堂に一泊して地蔵の慈悲を感じ、橋を誤覚化して旅の憂さを悟り愈々進みて愈々究して愈々勇を得此に於てか奇談百出珍話續々として、活潑一讀笑窮男子の偏見を破るに足るものあり。

三宅青軒君著 (寫真版入)

探偵 小説 **不思議の娘** 價三十錢 郵税四錢

花の如き乙女忽然として孤兒院に下る、天より降つたか、地から湧いたか、無名の豪傑、仙骨を帯びたる畫伯、神の如き醫佛の如き婦人、錯綜として天職を異するに汲々たり、點綴するに玉の如き青年を以てす、花の如き乙女の運命如何、秋風肅殺乎、春風和煦乎。

曉風山人著 (寫真版入)

探奇 小説 **秘密の怪洞** 價廿五錢 郵税四錢

佛國名家の嫡子香として行衛を知らず、二人の男女戀愛の爲めに相婚して遺産を奪はんとし利慾と嫉妬の爲めに相反し互に非命に死し難船に逢ひて救はれた孤女無底の怪洞に落ちて海賊の爲めに救はれ英國に父と邂逅す、人情の極致を極め波瀾曲折讀者手に汗を握るもの數次。

鹿島櫻巷君著 (寫真版入)

探奇 小説 **世界の秘密國** 價廿五錢 郵税四錢

世界の秘密國として有名なるチベット探險の勇士深く入つて其生死を知らず搜索者又魔法に依つて生地獄に落つ、第三の決死の勇士同志を募つて百難千難、猛獸蠻人と戦ひ、遂に世界の寶庫の秘密を開いて世界に驚嘆せしむ實に奇々怪々の文字なり。

福田琴月君著 (寫真版入)

滑稽 小説 **臆病將軍** 價廿五錢 郵税四錢

誤ちの功名勇者の名を得、盲目蛇に怯ぢざる無謀の突撃は、力死に一生の活路を得て思ひ設けぬ蠻人に千里の異境に回り合ふなど臆病詩人が滑稽の經歷は實に運命の不可思議なるを嘆せしむ、血腥き風吹き蜜の如き雨ふる、人生の妙趣説盡し一卷の中に藏む。

機川老禪著

機智 縱橫 **頓智百話** 價十五錢 郵税四錢

本書は古今の英雄豪傑、名媛、賢女、詩人墨客、碩學高僧等凡て世に傑出したるもの、人物が其奇才頓智、依つて身命を全し、禍を免れ、奇利を博し、名聲を擧げ、或は世のため、或は己の爲めに、父母親戚のため、或は一時の爲めに、奇談多し、話幾百を、更、輕快流麗の筆を揮つて眼前暗るが如く、直接に聴くが如く、聞き出たせるものなり、以て談話會の好材料とすべく、家庭の教訓とす可く近時絶えて見ざるの珍巻なり。

哄笑子著

奇談 百出 **滑稽大集會** 價十五錢 郵税四錢

本書は古今並に新作の奇談、珍話、落語、一口噺、洒落噺等すべて讀むものをして抱腹絶倒せしめ、お膳の宿替をなさしめ、頭のかきがねを外さしめ、おんばやます、園籠様も堪へ切れず、噴き出す可く、釋迦も孔子も基督もげら〜と大口開いて噴き出す可し、諸君の退屈する時、風託する時、煩悶する時、一度此巻を讀めば忽ち樂天主義となる事寄席へ行つたよりも功能があるなり。

宮崎來城君序 (寫真版入)

抱腹 絶倒 **大笑百話** 價十五錢 郵税四錢

滑稽の人に益ある暴君暴主をして、偶然として感悟する處あらしめ、諷刺の世に利ある笑ふ門には結來るの理詭に徴して、明なり滑稽笑話の人情を知りて間接直接に處世の秘訣を教ふる事古今東西其例知らず、諷刺の中諷刺あり、嬉笑の間、嬉笑あり、人の人生口をついて笑ふ事難しと嘆じ、一日主人笑ふ事幾回と叩つても、本書を讀み、一讀せば、一讀せば、二讀せば、三讀せば、本巻は實に病者に對て醫藥に優り、悶者に向て天來の妙音なりとす。

可笑樓喜樂著

滑稽 **大笑種本** 價十五錢 郵税四錢

本書は古今和漢東西に渉りて抱腹絶倒滑稽種本類の一口噺、落語、短話、百數十編を網羅せるもの、諷刺あり、教訓あり、罵詈あり、俗あり、老幼皆時賢、美醜、節操として各種各様の姿態あり、武士商人、車夫、頭、姑、嫁、雙、親戚、息、高僧、女學生、社會各層の人物が、各々特色の滑稽を發揮して、笑ふ可き噴き出す可き、滑稽が茶を濁す可き、珍無類の奇書なり。

羽化仙史著

百難旅行

價二十錢
郵税四錢

一難去れば一難來り前門虎を防げば後門
狼を迎ふ、幾度か宛に困み屢々災に遇ひ
或は放浪或は漂流、水火の巷に出入し劍
戰の間に馳驅す、少年が豪勇と義膽とは
讀む者として感憤興起せずんばあらず、
寔にこれ冒險小説中の傑作

加瀬花邦氏著

モンゴリヤ妖怪村

價廿五錢
郵税四錢

日露の大戦に斥候として派遣せられし三
軍人が道を失ふてよりさまよひの怪話奇
談に遭遇する奇々怪々の譚にして、或は
虎に襲はれ或は妖怪を退治し或は幽霊と
談じ馬賊を偵察する等何とも形容し難き
程面白き冒險小説にて一種特別の趣味あ
る讀物なり。

羽化仙史著

奇女無錢旅行

價廿五錢
郵税四錢

一奇女あり容顏花の如く音聲玉を囁する
に似たり而も膽力の強きこと有悖男子の
上にあり、獨逸、佛蘭西、米國等歐洲諸大陸を
跋渉し風餐露宿虎狼の窟を伺ひ、鯨の淵
にのぞむ奇談百出讀むもの悦として自失
せずんば休まず。

米國ミスマロック嬢原著三浦天民君譯

新空中旅行

價廿五錢
郵税四錢

西洋のある國の一王子が跋となり王位に
即きて叔父の爲めに簞奪せられ孤塔に幽
閉せられし時、異形の老婦人が檻樓切れ
を與へられしに乘りて空中を飛行し、燕
話し雲雀と遊び世界の状態を知り、識
増し遂に元の王位に歸る奇々妙々の少年
小説なり。

池田錦水君著(寫眞版數種入)(再版)

無錢修行

價廿五錢
郵税四錢

本書の目的は青年が苦學力行を奨勵する
に在り、因循姑息の念を除去するに在り、
獨立自活の法を教ふに在り、或は新聞配
達となり、立坊となり、貸家搜となり、托
鉢坊主となり、車夫となり、苦心困難の境
遇を小説的に描き出す、附録學生自活法。

早田玄洞君著(寫眞版數種入)(四版)

膽力修行

價廿五錢
郵税四錢

或は風雨の暗夜荒社廢寺を探り刑場古墳
を尋ねて膽力を練磨したる實験を描寫せ
るもの目次を一讀し如何に本書の趣味饒
多にして鍊膽の道に益あるかを知る可し
曰く人魂、曰く古寺、化地藏、古刑場、
水垢離、丑の刻、古城の櫓、巖窟の一夜、食
人怪、死人番、青面鬼等三十六題に分ち附
録として釋宗演禪師の座禪工夫を載す。

押川春浪君著(寫眞版數種入)(再版)

千年後の世界

價廿五錢
郵税四錢

天變地妖測り知る可からず、歡樂郷は忽
ちにして哀傷郷となる、菩薩變じて羅刹
となり、美人變じて夜叉となる、本書奇想
奇趣舞臺を廣く全世界に渉る、興隆乎、
破壊乎、光明乎、暗黒乎、一大疑問！

矢野滄浪君著(寫眞版數種入)(再版)

食客

價二十錢
郵税四錢

胸間燦爛たる勳章を掲げ、馬に鞭ちて
閣に上るの幾多英傑の前身を究むれば、
居たる一貧生に過ぎざりしなり、奴婢と
しなり、唯それ堅忍不拔勤勉力行よくそ
の成効を致したる所以なりとす、本書著
者が實踐したる閱歷を描くに趣味饒多
を以てす、一讀解願の滑稽あり、再讀腕
の快事あり、憤慨あり、三讀案を拍て呼ぶ

鹿島櫻巷君著 (密畫寫真版入)

探奇小説 變裝の怪人

價廿五錢 郵稅四錢

忽ちにして精髪の洋人、忽ちにして白髪の老翁、變じて温厚の好紳士、化して無頼の兇漢、變装の怪人とはこれぞ謂ふ、寔に妖怪の業乎、鬼神の技乎、萬金を盗み、殺人を敢てし美人を誘拐し、而も親友とし紳士として警察官老探偵の眼を晦まし、義侠なる青年が機敏なる活動はよく千辛萬苦を厭はず、大犯罪者の假面を剥ぎ、可憐薄命の美人を毒手より救ふ、妖雲一過して月始めて明なり、讀去誦來、感慨無限!!

長田偶得君著 (寫真版入) (四版)

妖怪奇談

價十五錢 郵稅四錢

本書は古今の幽霊妖怪の珍話奇聞中より最も面白く最も不思議なるもののみを選り、奇抜の筆を以て描き出されたる者一讀懐情、膚粟を生ずるの思ある可し、本書は實に消閑の讀物として、長夜の好話柄として適當なるのみならず或は以て靈魂不滅の参考となすべく、或は以て人情の極致を味ふ可く、或は以て世態の醜態を知る可く、或は以て膽力練磨の一助となす可し。

鹿島櫻巷君著 (密畫寫真版入)

探奇小説 野原の怪邸

價廿五錢 郵稅四錢

人乎、鬼乎、陰火燃え、悲鳴洩る、野原の空屋敷は衆人の疑團、青年身を挺して單身の活眼よく隠形術を觀破し古藪の死骸再び言を發して秘密の緒漸く解く一人罪惡忽ち暴露して疑團此に氷釋す、奇遇あり、奇縁あり、天遂に正に與す、人乎然り、鬼乎然らず、否な人間の中、鬼の如き兇漢あり、一讀三嘆!!

押川春浪君著 精巧寫真版入(再版)

千年後の世界

價廿五錢 郵稅四錢

千年後の世界は光明世界にあらず、暗黒世界なり、天國に非ずして地獄なり、山は崩れ、海は濁れ、人々も紳士も野獸の如くなり、若者序文に於て喝破す而して説く結果として如何、編を分つ事三十巻、花の如き女優あり劇場の争論あり、悪魔の襲撃、決闘あり、紳士と博士は地底の世界に入り不死の湖水に入り神の姿の人となり千年後、世界の惨状を見て驚愕する若たるに局を結ぶ奇想天外より落ち快筆天馬の如し。

羽化仙史著 (密畫寫真版入)

冒險怪奇文庫第一編 (再版)

九死 冒險奇旅行

價廿五錢 郵稅四錢

支那の一娘于米國の一丈夫と契り、萬里の路程途に風に逢ひ娘于海中に没す、丈夫失戀願の餘夢に娘の變人に苦めらるゝを見決然として探險の途に上る、娘于溺を免れ海賊の慘禍に逢ひ免れて間隙の隙に依り牢獄に苦しみ免れて河に墜り、深山に入り誤つて千仞の巖に落ち、此間經氣球上虎と闘ひ深林に毒蛇と戦ふ粒粒辛苦備に皆め遂に丈夫と邂逅しマツツカ國王に謁して間隙の嫌疑を此に結繩の縁始めて全し、血あり涙あり、花神舞ひ、海若狂ふ、寔に多趣多味壯快無比の文字。

羽化仙史著 (密畫寫真版入)

冒險怪奇文庫第三編

新海底旅行

價廿五錢 郵稅四錢

勇壯快活なる一青年と娉婦嬌嬌たる少婦と相締盟し海底を占領して日本の版圖に加へ、金銀珠玉の珍寶を採拾し千古の大偉勳を企つ或は鯨に襲はれ、電魚に刺され、賊に傷けられ、難族に苦しめらる、或は羽衣を被て敵軍の動靜を伺ひ、婚約に困しみ函中に擲せられ、千辛萬苦具に嘗めて終に素志を貫く遂に若想壯大破天荒の怪文字。

羽化仙史著 (密畫寫真版入)

冒險怪奇文庫第二編

冒險 奇人の航海

價廿五錢 郵稅四錢

空前奇妙爆裂彈の發明者絶海の寶島に隠る、扶桑國の一士官好奇心勃然として禁せす、新嘉坡の旅館に海賊の巨魁の秘密箱を奪ひて寶島の位置を知り同志を募りて萬里の波濤を蹴る士官一孤島に偉人に逢ひ具に發明の傳授を受け端艇に乗じてマダガスカルに到る談を緯とし此地に懸て士の新發明屈折望遠鏡に依り、己に懸して海賊に捕はれ居る娘子の行衛を知り遂に尋ねてこれを救ひ遂に階老を契るの譚を經とす。

羽化仙史著 (密畫寫真版入)

冒險怪奇文庫第四編

冒險 月世界探險

價廿五錢 郵稅四錢

科學界の一大發明あり、月世界飛行機械これなり、未曾有の人傑と、絶世の美人と相携へて萬里大空に飛出す、其遭遇する危難、逢着する奇蹟果して如何、怪事あり快事あり、讀了一遍、身は深酔として、天空萬里の外にあらん。

羽化仙史著 密畫寫真入

冒險怪奇文 怪奇人の魔法 價廿五錢 郵稅四錢

庫 第五編 小説 幽 靈 價廿五錢 郵稅四錢

庫 第六編 小説 新ナポレオン 價廿五錢 郵稅四錢

庫 第七編 小説 妖怪山の英雄 價廿五錢 郵稅四錢

庫 第八編 小説 生？死？ 價廿五錢 郵稅四錢

庫 第九編 小説 空中電氣旅行 價廿五錢 郵稅四錢

庫 第十編 小説 食人國探險 價廿五錢 郵稅四錢

庫 第十一編 小説 無底湖の秘密 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻若著 密畫寫真入

ト奇跡 不死の靈窟 價廿五錢 郵稅四錢

美人國探險 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒著 密畫寫真入

武士道 土手の道哲 價廿五錢 郵稅四錢

小 武士道 續土手の道哲 價廿五錢 郵稅四錢

小 武士道 女 忠臣藏 價廿五錢 郵稅四錢

明 傑 今様水滸傳 價三十錢 郵稅四錢

廣津柳浪先生序 有本天演著

家 庭 女 天一坊 價廿五錢 郵稅四錢

曉風山人著

滑稽 魔窟の女 價廿五錢 郵稅四錢

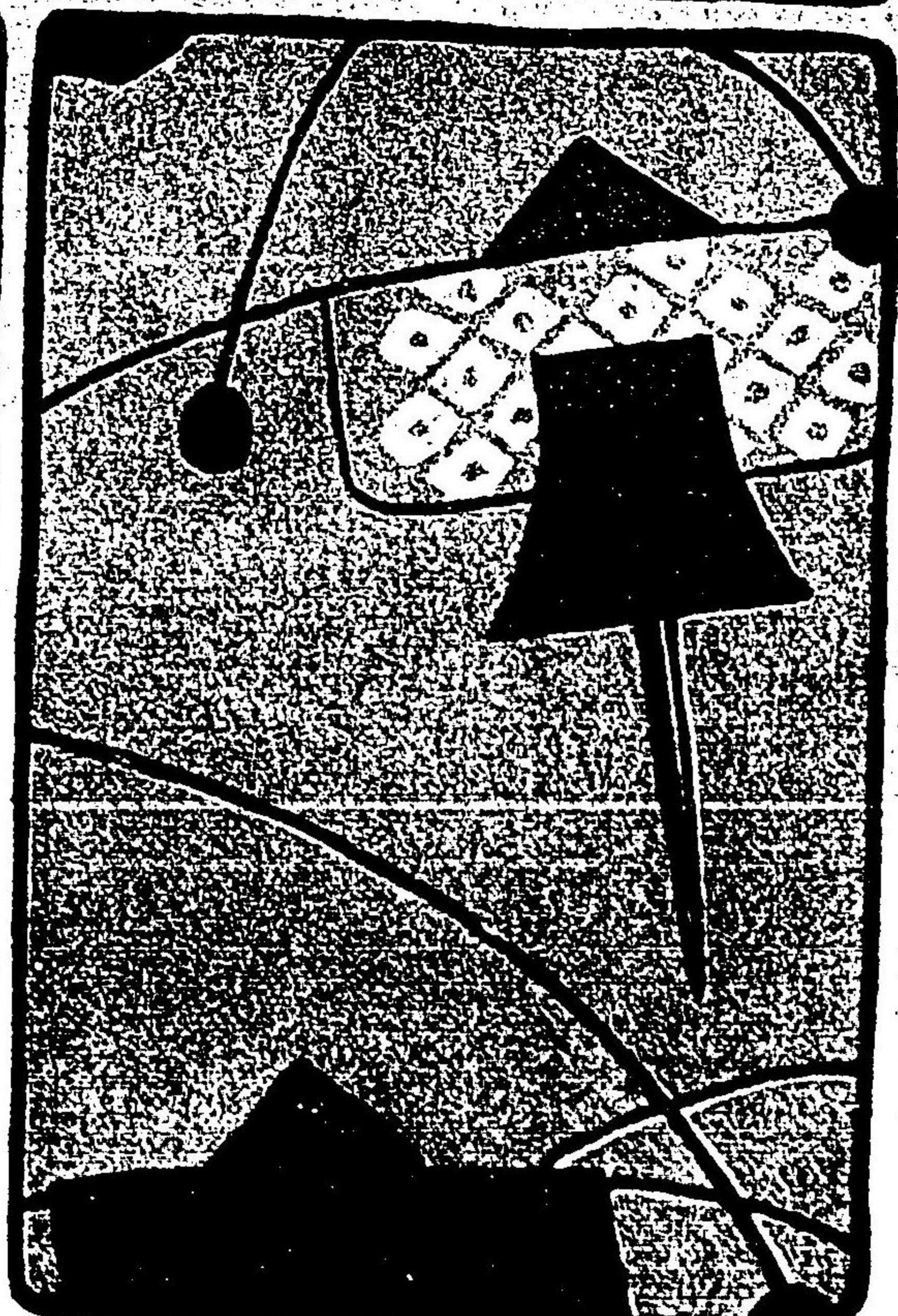
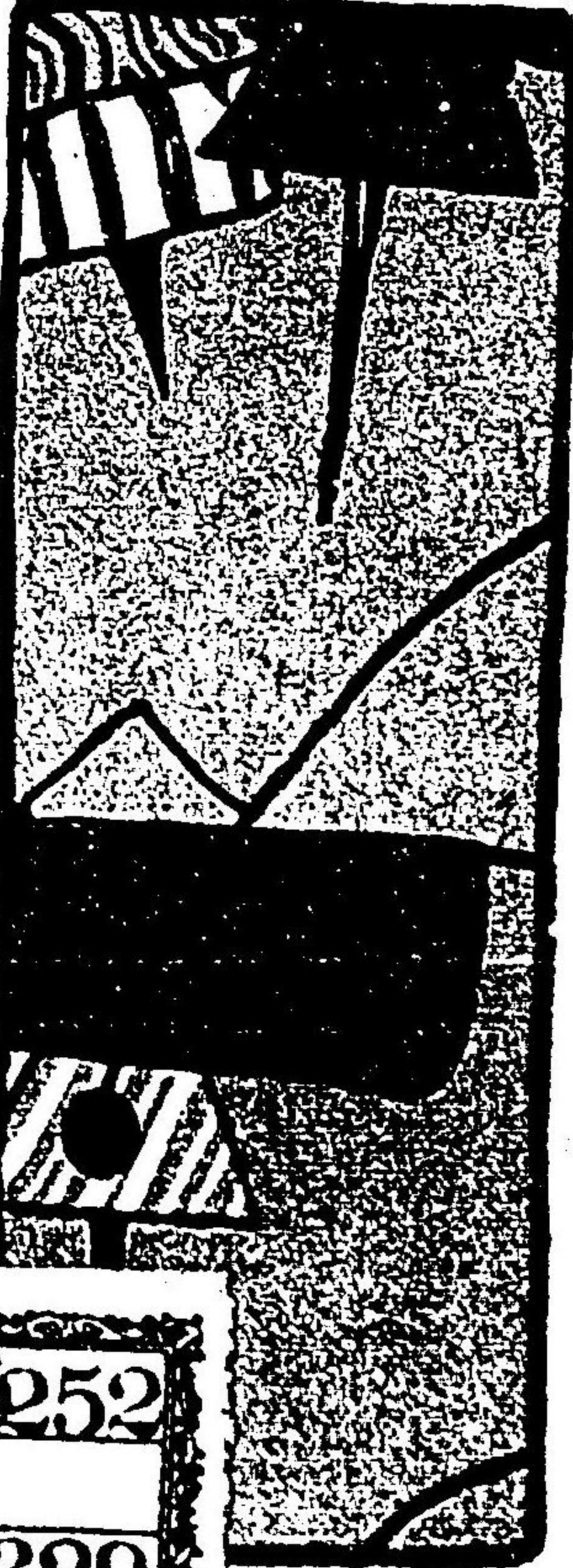
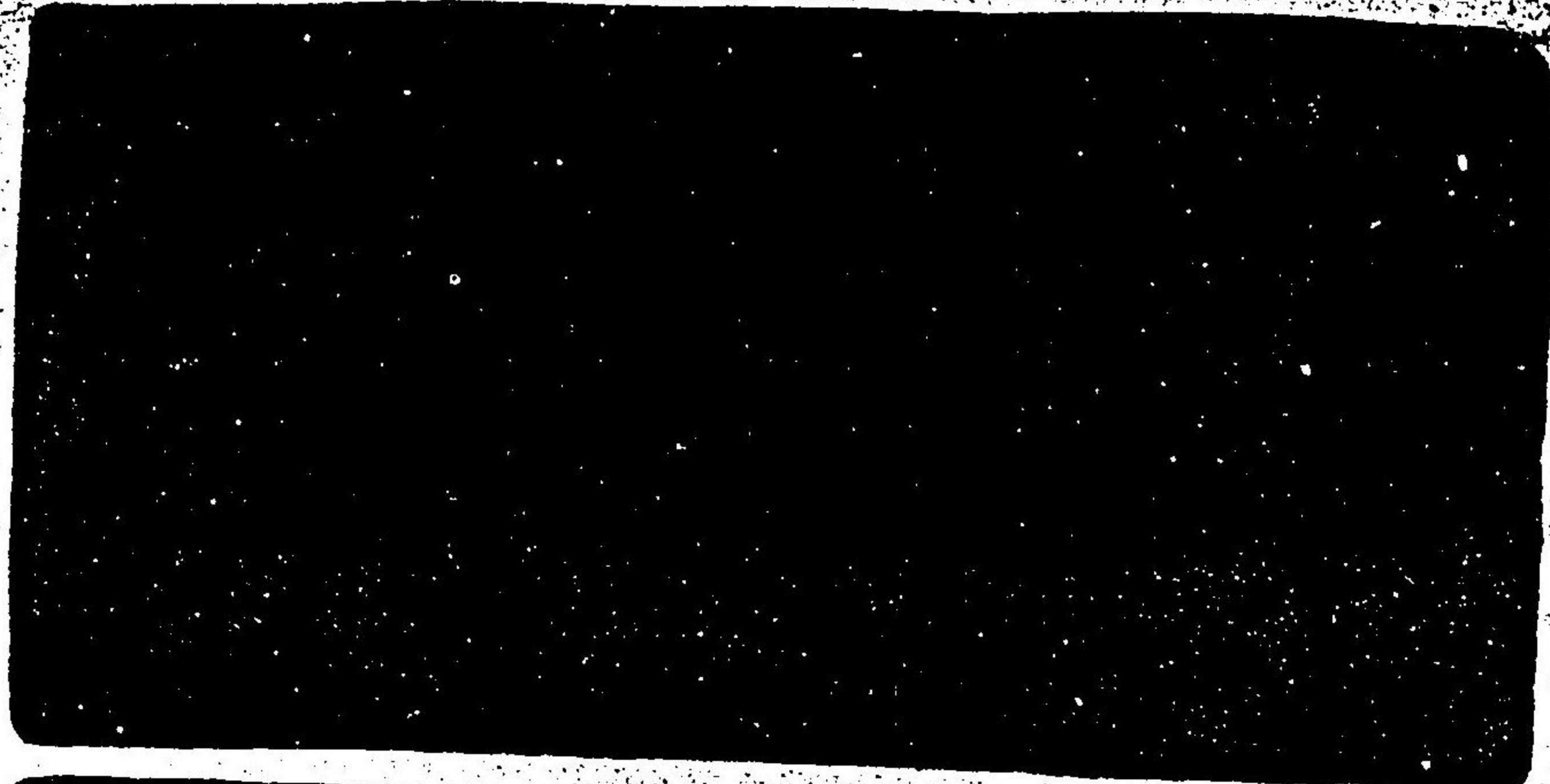
五峰仙史著 寫真版入

拖飯 滑稽 旅行 價廿五錢 郵稅四錢

五峰仙史著 密畫寫真入

洋行 世界滑稽旅行 價廿五錢 郵稅四錢





252
329

094154-000-7

特12-997

人生の行路

草の人/著

M39

DBQ-1635

